

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

## 「あの日」の後

原 歌

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「煙の匂い」  
しばらくの間、生魚を焼く匂いがいやでたまらなかった。ことに鮓はいけない。その匂いがそっくりなのだ。

私たちが、大手町九丁目の焼け跡から、広島市の東のはずれを流れているえんこう川に近い師範附属小学校の教室に避難して来たのは、原子爆弾を落とされた日から四日目ぐらいだった。

その校舎は、ぶどう畑や、いもやなすび畑にとりかこまれた町のはずれに建っていたので、崩れずにどうにかそのまま建っ  
てはいたけれど、屋根瓦は飛び散り、窓のガラスは全部なくなり、標本室では大小のビンなどすっかり倒れ壊れて、アルコールの臭いが満ち、足のふみ場もない有様だった。

私達は一室を掃除し、作法室などのあまり傷んでいない畳を探してきて敷きならべ、窓にはベニヤ板などを打ちつけて、どうにか住むことが出来るようになったのだ。

学校は町はずれだからと、前もってその倉庫に、職員の希望者の布とんや蚊帳、行李など預ってもらってあったので、それが早速役に立ち、大助りだった。

炊事は、出入口のたたき、こわれバケツをかまどにし、あたりに壊れ散っている窓枠などを薪代りに燃やして、雑炊など作った。

畑のむこうの川の土手には、雑草が生い繁り、暑い夏の陽に緑がむれかえっていた。

その土手のあちこちで、昼も夜も、火を燃やすのが見えた。真赤に、緋色に、又白っぽく炎がゆれる中に、うす黒く箱の影が見えたり、人間の形らしいものも、ちらちらすることもあった。それは、身内の人にやっとなし出された死体を、そこで火葬にしているのだった。

あの焼けただれ、石くれと化した町中を離れて、真昼の緑の中で燃えつづける火は、静かで、戦争とは無縁のもののように美しかった。

しかし、いつも夕方になると風向きが変わって、その煙がこちらに流れて来るようになると、その屍を焼く異様な匂いには、何とも我慢が出来ず閉口した。その煙の匂いは、生魚を焼く匂いの生ぐささに似ていた。ことに川魚の鮓を焼く匂いはそっくりで、その後しばらくはその臭いの記憶が重なって、何とも嫌でたまらなかった。

その頃、隣りの室には事務の人の一家がいて、食糧不足の時だったから、その男の子がよく鮓をとって来て焼くのだ。その川魚特有の匂いがそっくりなのだ。まだ小学生の男の子だったけれど、あの時丁度窓に腰かけていて、瞳にあの閃光を受け、失明しかけていた様だった。その後どうなっただろうか。

土手の火葬は、やがて止んだ。日が経てば暑い最中、探して誰とわかる死体も無くなったのだろう。

校長一家も、比治山近くの官舎から避難して、一室に住んで



いた。

その奥様は、畑の手入れをしていて、背中一面の火傷をされた。初めの頃は割合お元氣だったのに、日に日に容態が悪くなり、時には臨時の救護所まで、学生達が担架に乗せ、診てもらいに運んで行ったりしたけれど、薬もなく、医者も足らず、今まで経験したことの無い種類の火傷では手のほどこしようもなく、ずい分苦しまれた後に、八月末とうとう亡くなられてしまった。

お葬式らしいことも出来ず、教官等が集まり校庭の隅に穴を掘り、ガソリンをかけて、火葬にされたのだらう。雨が強く降っている中で、火はなかなか燃えあがらず、白い煙が横に這う様に流れていった。

### 「古い鍋」

うちの台所に、直径一八糎足らずのみすばらしい鍋がある。底はすすけて黒いものがまだらにこびり着き、手もとれて穴が残っているばかりだけれども、中はまだ光っていて、毎朝、味噌汁のだしを取ったり、時にはポウル代りに玉子をといいたり他の沢山の新しい鍋に負けず、よく役に立って、今だに現役で働いている。

私達が附属小学校の教室に住んでいた頃、終戦になって間もなくだった。小使いの小父さんが、飛行機を作っていた工場でもう作れなくなったその材料で、鍋を作って売り出したものだから買わないかと、持って来たものだ。

当時としては、かなり高いやみ値だったけれど、ピカピカ光った小さな鍋は、殆んど無一物に近い私達にとって、本当に欲しい、役に立つ物だった。

その小使いの小父さんは、夫婦二人で小使い室に住み込んでいた。子供が三人もいたし、翌年二月にはそでお産もした私達は、何かとずい分お世話になった。

その小父さんは、まだ六十才には遠かったのだらうけれど、小柄な小太りな身体で、頭はつるつるで目が細く、にこにこしている時は、人が良さそうに見えるけれど、何処かぬけ目のない、油断の出来ない所もあるような人柄だった。

おかみさんも、浅黒く、あまり美人ではないけれど、昔は商売女だったのではないかという様子があった。子供が無くて、大分「やみ」や何かで、お金をためているらしいとの噂もあった。

学童疎開で田舎に行っていた為に、終戦後家に戻っても、家は焼け、両親も身内も皆亡くなっていて、一人ぼっちになってしまったという附属小学校の小さな女の子がいた。小使さん夫婦が引き取って、自分達の子供にして育てるということだった。静かで大人しく、淋しそうな瞳のその女の子を思い浮かべる度に、小父さん達は、そろばんずくでない「本当の愛情」で育ててくれたらどうか……と気になる。

学童疎開で子供だけ生き残り、身内が誰も無くなった小さな子供達が、沢山あったと思うけれど、その後その子供達はどのように生きて行ったらどうか。



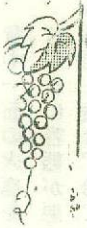
戦争は惨酷なものだ。まして原爆戦争は、あらゆるものの生命をうばい、傷つけ、破壊し、不幸で世界を押しつぶす。

その小使いさんから買った鍋には、ふたが無かったので、やはり隣室に住む剣道の先生がそれを作って下さった。

とても器用な先生は、何かの板を円く切り、持つところもつけて、なかなか良く出来ていた。大きな学生の息子さんと二人と、優しい奥様がいらして、うちの子供たちは、「お兄さん、お兄さん」とよく遊んでもらった。私は奥様に、食糧不足をこぼしたり、いろんな事を相談して教えてもらったりしたものだ。先生には草履も作っていた。師範学校の校舎の方には軍隊が入っていたけれど、終戦になると皆居なくなり、その後には兵器や弾薬など沢山放ってあったらしい。

アメリカ軍が来ると大変だというので、あわてて池に放りこんだり、土に埋めたり処分したらしいけれど、その中のピストルのサック等の皮製品を、うまく利用して草履を作って下さった。ろくな履物もない時、本当に嬉しかった。

それから三十五年後の今、ふたはもう二代目か三代目になっているけれど、鍋の方は、薪をもやして煮物をした頃の、真黒にすすけた跡をまだらに残しながらも、うちの台所で健在である。



## 襷せしノート

赤塚浩子

お盆の頃に夏らしい太陽を見たのみで、今年の夏は冷たく雨つづきであった。階段の下の物入れを開くと何か湿っぽい匂いがする。九月に入って爽やかな空が続いたので、早速その中の物を引っ張り出した。それは雑品の山である。一応風を入れて処分もせずに又元へ戻した。

その時見出した一冊のノート、表紙もとれ色も襷せた薄いノート、それは私の戦時中の農繁期勤労奉仕の日記である。

昭和十七年秋、地区の女子青年団員は、一志郡大三村、一志郡川合村、そして安濃郡明合村の各地へ十日間、三名乃至六名が共同炊事及び託児に勤労奉仕隊として出動した。

「十一月十五日 晴 風強し いよいよ行くのだ。八町からガタガタの安濃鉄道に乗り荒木駅へ」という書き出しで始まっている。

私は安濃郡明合村へ、十一月十五日から二十四日迄六名で行った。松田様というお宅が宿泊所となり、報國寺が共同炊事場であり、託児所であった。

空襲の時に、貴重な品を沢山失っているのに、このノートはたまたま地下に埋めた戸棚の中にあって焼け残ったのである。その後結婚の時も、再々の引っ越しの時も、下積みのまま四十